抱影先生のはがき

——聖人窟のことなど——

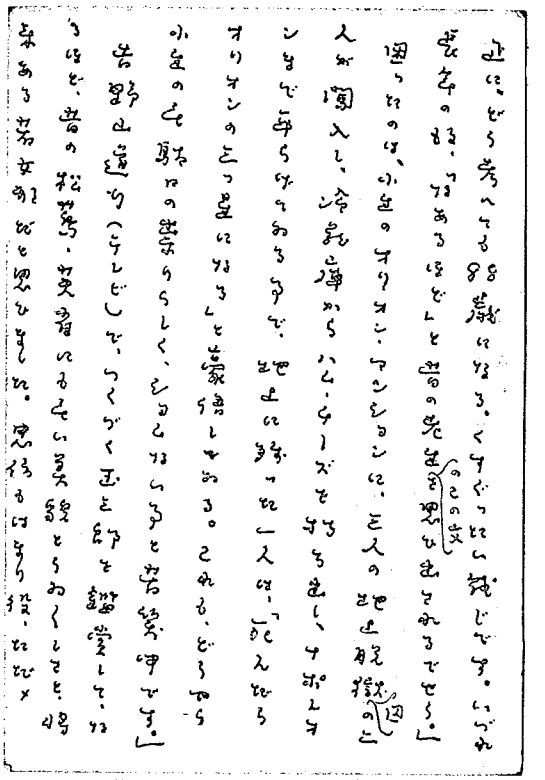
石　田　五　郎*

野尻抱影先生には数多くの著書があるが，これが“最後の著作”と心にきめられたものが何冊かある。昭和46年に恒星社から刊行された『星と東方美術』はその一例である。

昭和 44 年6月4日付のハガキの表書の下半分に「実は『星と美術』という本を恒星社から頼まれ，敦煌の『燉盛見仏五星図』と共に，この図を考証するつもりだったので，尚ほタタイテみたいと思います．巻頭に殷末の玉器『璇璣玉衡』を出してわが天文界に一石を投じます．小生最後のリューインを下げる著となるでせう（原文のまま）」とあるのがそれである．文中この図とあるのはその年の春に上野の国立博物館で開催された『スキタイとシルクロード美術展』に出品されたカラ・ホト（黒城）出土の星宿マンダラ図のことで，阿彌陀仏を中心に，たて長の絵の上部には黄道 12 宮，28 宿を配し，下部には日月5星の他に，羅候（ラゴウ）・計都（ケイト）・月孛（ゲッパイ）・紫炁（シキ）という仮空の4惑星を加えた怪異な 11 人の神像を画いたもので，特に最後の2神の月孛，紫炁は髪の毛から蛇身が姿を現わし，ペルセウスの退治した女怪メドゥサを連想するが，これは容貌怪異の男神像である．

この本の構想は前々からおもちになっていたようで，「東洋美術館の開館では頼まれて月報に東寺講堂の降三世明王に踏まへられてゐる大自在天夫妻をテーマに『シヴァ神の一族』を書きました．すべて“星を忘れたカナリヤ”のホビーです．呵々」(43.12.1 付) あたりから，「最近，弟（大仏次郎氏）からヒンドゥー期の神像研究（カルカッタ出版）の書その他を貰って，日夜夢中で急に命が惜しくなりました」(43.12.27 付) となり，翌年の私の初大師脂りの報告の返書に「東寺講堂の壮観ごらんの由，あの密教仏群は目下執筆中のヒンドゥーの神々の原身で帝釈天 (Indna) は姪道楽（ドラ）です．」(44.1.22) と早速に便りをいただいた．また「四天王寺の七星剣ごらんの由，見事でせう．あれを手に持って石切梶原もどきにタメツスガメツした人間は恐らく稀でせう．……写真をやっと手に入れましたが，新聞にはムリでした．あの雑筆，史学者にも多少反響がありました」(44.5.7 付) と主題が幅広く展開していくのがわかった．

やがて秋もすぎて「小生，法隆寺の星曼荼羅をシラミつぶしに探究し，太子絵伝の荧惑星と道明寺をも終り，これから春日裏地獄谷聖人窟の妙見像から大和法輪寺，



抱影先生のはがき (48.1.7 付)

三井寺の妙見へと進むのですが，聖人窟のは二，三の写真でも北斗七星の彫刻がどうもはっきりせず，現在はカナアミ越しでよく見取れないという話ですが，貴君が訪ねられたのなら，北斗の位置が向って左から頭上に引いてゐるかどうか教へて下さい．右にも星らしいものがあるやうです」(44.11.25) というハガキをいただき，私はまだここを訪ねたことがなかったので，淡交新社から出た『大和の石仏』に妙見が出ているとおしらせすると，小生も同じ本を開いています．(H 女史の文にはうんざりします) よく判らなかったが今度は大月輪の向って左で，北斗七星が柄を上に立ってゐると思ひました．経軌によれば妙見は右手で蓮華杖を持ち，左手でその末を持ってゐるやうですと本の写真を鉛筆でスケッチし，疑わしき個所にマークが印してあった．「“七星様のものが刻まれてゐる”と初めて書いたのは西村貞著『南都石仏巡礼（昭和4年出版）で写真も出てゐました．その2年後小生に話したのは会津八一でした．現在は鉄條網ごしでよく見えないと友人は失望してゐました．」(44.12.2) と

* 東京天文台岡山天体物理観測所

いうハガキをいただいた.

また，年賀状の片隅に「地獄谷の妙見，氣になるのは北斗は頭上にあるべきだといふことで，左横のを北斗とすると，頭上のは何の星か，これは永久のナゾです」とあり，その御執心の深さに感嘆した.

年が更って「薬師寺台座の四神をやっと脱稿しました．玄武が大物で，結論はスキタイの“動的相剋文”が中国の漢代を通って日本へも入りこんだというすでに大百科にも出てゐる解釈です.……」(45.1.26) と一応は“妙見さん”を通過したかにお見受けした．事実「本にも改めて南極老人星を入れました．青木大米の文人画に雲の上から豆粒ほどの寿老人が侍童と下りてくる瓢々としたのがあり，それと済州島に寿星を点じた李朝の珍らしい古図を入れます.」とあったが，それにつづいて「地獄の妙見像もあれを使ふのですが，左下のを北斗と決めるにはまだ躊躇してゐます．経軌では頭上にあるべきですから.」(45.3.11) とあったので，私はためらいもなく聖人窟を訪れる決心をした．その頃，私は一家で西国 33 カ所の『コマ切れ巡礼』をつづけていたので，スケジュールは宇治の三室戸寺の前後に番外として加えることにし，3 月下旬当時幼稚園に行っていた下の子が「アサヨル列車」と名付けた鴨方発一番の 4 時 30 分の電車にのり，奈良へ向った.

*　　*　　*

奈良では『大和の石仏』に名の出ていた奈良国立文化財研究所の長谷川誠氏を訪ね，聖人窟についていろいろのことをきいた．柳生街道沿いのこのあたりは国有試験林である檜の密林で，聖人窟の管理も営林署の手で行われていることがわかった．早速に営林署で鍵をかり，タクシーで春日奥山ドライブウェーをのぼりつめ，そこからは細い山道に入る．林間にはあちこちと残雪があり，青空も見えぬトンネルのような薄暗い道だが，聖人窟の所はやや開け，営林署で作ったきれいなペンキ塗りの鉄柵の扉があり，親切にもカメラがさしこめる穴があいている.

大きな一枚岩のオーバーハングの下に，正面が弥勒三尊，右手に妙見がある．柔かそうな岩肌に刻まれた線彫りの磨崖仏は，所々は丹塗りも色鮮やかに残り，とても 800 年の春秋を経てきたものとは思えない．諳んじていた抱影先生のハガキの文面の如く，妙見菩薩の上部，両脇には丸印の星文が直線でつながれ，特に左側の星列の上から 2 番目にはふたつの星が並び，かすかな短線が両星を水平につないでいる．これはミザル・アルコルの星対である．これからスケッチや写真撮影がはじまった．結果をみると，フラッシュをつかったものよりも，子供の頭を三脚代りにしてスロー・シャッター (1/5 秒) でとったものの方が色あざやかに写っていた．夕暮の柳生街道を急ぎ足で下り，(なにしろここは首吊りの名所であると聞いた) 奈良の宿についた時は真暗になっていた.

早速にハガキにスケッチの写しと星文の位置をかき，速達便で投函した.

「只今奈良よりの速達頂戴いたしました．これは重大ニュースで，しばらく茫然とし，そのあとで感動しました．このスケッチと説明をぜひ加へさせて戴きます．写真(『大和の石仏』所載) 及び昨年 11 月 28 日の珍スケッチとも照し合わせ，特に写真と比べて，まるで手にとるやうに一々の星文を見とどける事が出来，いくたびか溜息をつきました.」(45.3.23)

このあと，朝日新聞の学芸欄に抱影先生の小文がのり，その後の詳細は『星と東方美術』に収められた.

*　　*　　*

抱影先生からハガキをいただくようになったのは，岡山天文博物館で発行し，第 9 号で休刊となった「おかやま天文教室』という雑誌に執筆をおねがいして以来で，第 4 号 (1962 年) に「あこがれの老人星」，第 7 号 (1964 年)，第 8 号 (1965 年) に「瀬戸内海の星の和名，上・下」という原稿をいただいた.

折にふれていただくハガキには，星のことばかりでなく，古美術，仏像の話もあり，またテレビで御覧になった現代の役者の芝居の短評から，明治末年の名優の思い出，はては御弟子衆を集めて開いた「地口行灯の会」での秀句の御披露，御知友の消息にまで及んだ.

「志賀さんは文壇人には厳しいコワイ人だったが，さもないすぐ年下の小生には優しい人，訪れるごとに遠い門まで夫人と見送られ横町を曲るまで立ってゐてふり向いてオジギを交はすまで待ってゐました．この一事を思ひ出すだけでもタマりません．……見舞も臨終十分前に娘を使はし，あの立派な老翁のイメージを守り，また昨日入棺前に忰に白・クリームのバラを沢山届けさせ，棺につめて貰ひました．告別式にも宅で写真にオジギ (合掌はした事なし) します．これで志賀さんは微笑してくれます.」(46.10.24) これは親しく師事された志賀直哉氏の死．「困ったのは小生のオリオン・マンションに三人の地上脱獄囚の二人が闖入し，……ナポレオンまで平らげてゐる……」(48.1.7) は赤軍派のテル・アビブ事件の直後．「先般は御弔辞有難う存じました．“今さら驚くべからず”(船弁慶) で万事終了……机に戻り，新著をつづけています．18日に (プラネタリウム) でサヨナラ講演 (これで 4 回目)……「(48.5.15) これは御舎弟大仏次郎氏の逝去．人間生死についての覚悟はこの頃から確固たるものがあった.

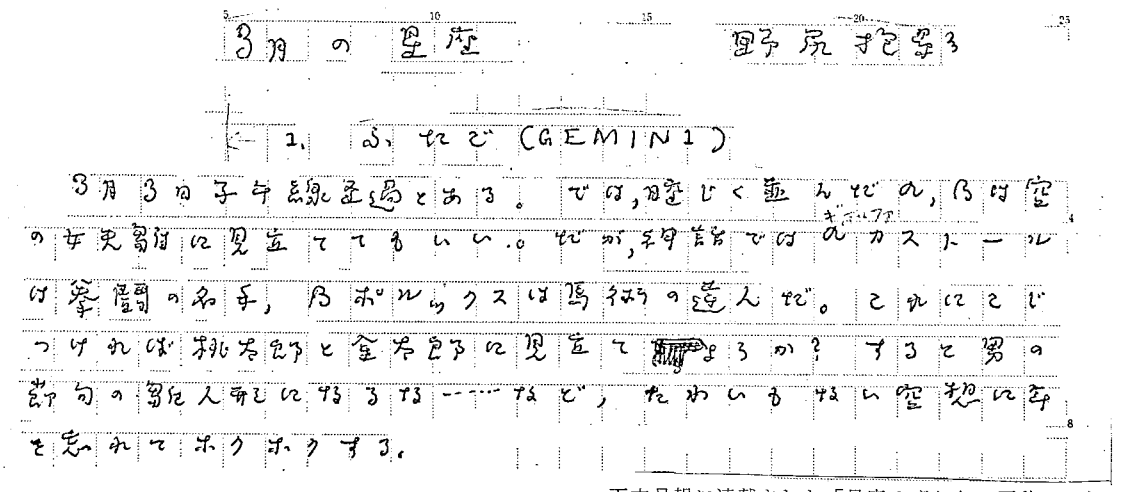
昭和 52 年 10 月 30 日に御他界，奇しくもその 5 日前の 10 月 25 日に詩的宇宙論者稲垣足穂氏が死去しているが，「タルホ君は昔小宅を訪れ，漢代出土の白玉の杯でビール

を飲ませたところ喜んでゐました．全集（？）が出た時も寄稿を頼んで来たが，小説を貰っても内容がややこしくて読み通したことがないので断りました．」(46.6.29)．早足の抱影先生のこと故，御両所はあるいは六道の辻あたりで会われたかもしれない．抱影先生はオリオンマンションに向ったのは確かだが，タルホ氏はいまどの星をめざしブレリオ単葉機をとばしつづけているのであろう．

野尻抱影著書目録

1925	星座巡礼	研究社
1927	星座めぐり	研究社
1929(?)	三つ星の頃（学生小説）	研究社
1931	星座風景	研究社
1933	星座神話	研究社
1934	星座春秋	研究社
1936	日本の星	研究社
1937	星座カード	研究社
1940(?)	星を語る	研究社
1940	星と東西文学	研究社
1942	星	恒星社
1946	星座めぐり盤	研究社
	星座めぐり（春・夏・秋・冬）	研究社
	星の美と神秘	恒星社
1947	星座神話図誌	鎌倉書房
1949	星まんだら	京都印書房
1950	全天星座帳	研究社
1951	星座・月面盤	地平社
	まどからのぞくお月さん	羽田書店
	太　陽	小学館
	小さな天文学者	妙義出版社
1952	星座神話	研究社出版
	リビングストンとスタンレー	鹿島図書出版
	星座十二ケ月	岩崎書店
	星の質問帳	縄書房
	星のはなし	国民図書刊行会
1953	天体と宇宙	偕成社
	少年天文学者	三啓社
	天体の話	講談社
	星と星座伝説	偕成社
	台風のはなし	岩崎書店
1954	星恋（山口誓子との共著）	中央公論社
1955	星三百六十五夜	中央公論社
	星と伝説	角川書店
1957	星の神話伝説集成	恒星社
1956	英文学裏町話	研究社
	星まんだら	鱒書房
	ろんどん怪盗伝	鱒書房
	宇宙のなぞ	偕成社
	星座見学	恒星社
	新星座巡礼	角川書店（角川文庫）
1957	日本の星（星の方言集）	中央公論社
	分図解説全天星座帳	研究社
	星と東西民族	恒星社
	星座歳時記	恒星社
	星座の話	偕成社
	星座（新天文学講座 第1巻　数氏と共著）	恒星社
	世界逸話全集	東京創元社
	星座遍歴	恒星社
	天体と宇宙	偕成社
1958	新星座めぐり	研究社
1961	ものがたりガリレオ	偕成社
1963	星座と伝説	ポプラ社
1964	星座十二ケ月	岩崎書店
1969	星三百六十五夜	恒星社
1971	星と東方美術	恒星社
1972(?)	ガリレオ	偕成社
1972	鶴の舞	光風社書店
1973(?)	星と伝説	偕成社
1974	日本星名辞典	東京堂書店
1976	大泥棒紳士録	工作舎
	日本の星（星の方言集）	中央公論社（中公文庫）
1977	星・古典好日	恒星社
	星アラベスク	河出書房新社
	星の神話伝説	講談社（学術文庫）

以上のほか，訳書と編著（主として語学の注解本）約十数点，また大仏次郎の名で発表されている初期の訳書数点があります．


3月の星座　　野尻抱影

1. ふたご（GEMINI）

3月3日子年線星過とある。では，暗じく並んだ α，β は空の女史翁に見立ててもいい。だが，支那では α カストールは拳闘の名手，β ポルックスは馬術の達人だ。これにとびつければ銀色と金色に見立てるか？ すると男の節句の武人飾りにするする……など，たわいもない空想に年を忘れてホクホクする。

天文月報に連載された「星座めぐり」の原稿の一部